

一年に一度のユースシンポジウム、14回目は9月29日午前10時から中京青少年活動センターで開催します。全体会では、さまざまなテーマで活動する若者たちが、活動への個人としての想いを語り合う「トークセッション」を実施します。第2部では来場者との対話の場「トークフリマ」、さまざまな表現で発信する「活動ブース」、社会テーマを共に考える「分科会」などを実施します。等身大の「いま」と若者が描く「未来の出会い」に立ち会いませんか？

*申込・問い合わせ：京都市ユースサービス協会事務局

075-213-3681 (一般 500円、青少年無料)

ボランティアとしての不安、子どもたちが将来を見通せるための支援のあり方など、学習支援の現場を踏まえた実践的な課題が論点になりました。

NPO法人山科靨



「子どもの貧困」を考える フォーラムを開催

貧困対策推進法の成立で盛況

山科青少年活動センター ユースワーカー 上原 裕介

山科青少年活動センターでは、6月30日(日)に「子どもの貧困」と学習支援フォーラム in 山科」を開催しました。6月19日の国会で子どもの貧困対策推進法が成立し大きな社会的関心事となったこともあり、関西地方だけでなく九州や東北など全国各地から定員を超える113人の参加があり、活発な議論が行われました。県立広島大学の田中聡子先生による基調講演では、「子どもの貧困」の定義や拡大の現状、その社会構造的要因が、豊富なデータをもとにわかりやすく解説された後、生活保護世帯の自立



支援プログラムとして広がっている学習支援事業の類型的な分析と、スタッフへのインタビュー結果が紹介されました。そして最後に子どもの貧困対策推進法の成立を受けた国、自治体の責務や学習支援事業の課題をまとめました。

基調講演を受けて分科会では、4つのテーマに分かれ、熱心な議論が繰り広げられました。学習支援に関わる学生ボランティアや福祉関係者が集まった分科会A「子どもの学びを支える若者たち」では、学習支援団体Atiasの日野貴博氏、日本福祉大学アンビシャス・ネットワークの平沢彩未氏からの報告を受け、学習支援と居場所的支援とのバランス、活動資金の確保や組織運営のむずかしさ、専門家ではない

地域団体の役員やNPO関係者が集まった分科会B「いま、地域ができること」では、京都市母子寡婦福祉連合会西京支部(学習支援会「ゆう」)の中川敏子氏、青少年の健全育成を考

えるフォーラム(中3学習会「洛西スコレ」)の玉手優子氏から報告がありました。中川氏からは子どもたちだけでなく、ひとり親家庭のお母さんたちにとっても集いの場、語り合いの場になっていることが報告され、玉手氏からは、大学生ボランティアを地域の民生児童委員がコーディネートすることで、大学生が安心して子どもと関わっている様子が報告されました。学校関係者や大学生が多く集まった分科会C「学校から見える「子どもの貧困」」では、京都府教育委員会スクールソーシャルワーカーの長澤哲也氏、元養護教諭の所朱美氏から、今の学校現場の状況が伝えられました。それを受けてグループ討議では、教育と福祉をつなぐスクールソーシャルワーカーへの期待や、子どもの貧困対策事業と学校との連携のあり方、保健室にくる子どもたちの生活についてなど、さまざまな議論が展開されました。

酬こどものひろばによる子どもの生活支援をクローズアップした分科会D「子どもの生活を支えるNPOの挑戦」では、まず「子どもの貧困」をリアルに感じ取るために貧困ライン以下の金額で生活のやりくりを考えてみるワークが行なわれ、その後、同法人の幸重忠孝氏から生活支援事業で出逢った子どもたちの様子が映像記録とともに報告されました。

自由参加のフリーディスカッションには、参加者の半数以上がその場に残り、各分科会での議論を共有するとともに、分科会よりも少数のグループでざっくりばらんな討論が行なわれました。新たな出逢いや交流がいくつも生まれ、参加者それぞれに「日頃の実践に活かせることが見つかった」「新たなつながりができて刺激を受けた」と充実感を得ることができ、盛会のうちに終了しました。